

対面式の修復的司法カンファレンスは、再犯の減少と被害者の満足 の促進という点で、費用対効果が高い



犯罪の加害者と被害者が対面して行う修復的司法カンファレンス（RJCs）は、再犯への効果は控えめではあるが、高い費用対効果を有している。事件解決後の被害者の満足は、RJCsに参加した人々の方が、通常の刑事司法手続き、つまり裁判による処理のみの人々よりも一貫して高い。

このレビューは何についてのものか？

修復的司法アプローチは、犯罪の加害者に危害を加えるのではなく、犯罪によってもたらされた損害を修復しようとするものである。このレビューは、加害者が被害者と顔を合わせ、犯罪行為とその結果について話し合う対面式のRJCsを対象としている。

対面式のRJCsでは、当事者は自分がどのように犯罪にかかわっているのかについて述べ、被害者はもたらされた損害について説明する。そして犯罪の加害者も含む全員で、どのようにすれば損害が修復されるのか話し合われる。

このレビューは、対面式の修復的司法カンファレンスが行われた場合とスタンダードな刑事司法手続きのみが行われた場合とを比較し、(a)事件処理後2年間の再犯に対する効果と(b)被害者の満足感を測定している。

対面式のRJCsに参加した被害者は、
心的外傷後ストレス症候群による
苦痛が軽減される

このレビューのねらいは何か？

このキャンベル系統的レビューは、対面式の修復的司法カンファレンスの再犯と被害者の満足感への効果を検証している。本系統的レビューには、10の研究が含まれる。

どのような研究が含まれているのか？

このレビューに含まれる研究は、すべて次のような特徴を有している。すなわち、研究は、(1) 無作為化法によって、スタンダードな刑事司法手続きのみが行われた場合と、対面式のRJCsが行われた場合の効果を比較し、(2) 最低1名の被害者と1名の加害者が含まれる対面式RJCsに関して報告しており、(3) 事件処理後2年間の有罪判決または再逮捕の頻度に関するデータが、双方の処理の効果が算出できるような形で提供され、(4) 1994年以降に英語で公開されたものである。



このレビューはどのようにして更新されるのか？

調査は2012年に実施されたものである。このキャンベル系統的レビューは、2013年11月1日に公表されている。

キャンベル共同計画とは何か？

キャンベル共同計画とは、系統的レビューを公表する、国際的、任意的、非営利的な研究ネットワークである。われわれは、社会科学や行動科学の領域における取り組みのエビデンスの質を要約し、評価している。われわれの目的は、人々のより良い選択とより良い政策決定を支援することである。

このサマリーについて

このサマリーは、Simon Goudie (Campbell Collaboration)によって執筆されたものである。このPLSは、Campbell Systematic Review 2013:12 Restorative Justice Conferencing(RJC) Using Face-to-Face Meetings of Offenders and Victims: Effects on Offender Recidivism and Victim Satisfactionに基づいている。系統的レビューは、Heather Strang, Lawrence W. Sherman, Evan Mayo-Wilson, Daniel Woods, and Barak Ariel(10.4073/csr.2013.12)によるものである。Tanya Kristiansen (Campbell Collaboration)は、サマリーのレイアウトと編集を行った。このサマリーの制作にあたりthe American Institutes for Researchが資金援助を快諾してくれた。



この条件を満たした研究は、英国(7件)、オーストラリア(2件)、そしてアメリカ合衆国(1件)で認められた。いくつかの実験では、対面式のRJCにランダムに事件を割り振ることが行われている。そこでは、起訴からの公判前ダイバージョンとして行われたものもあれば、有罪判決後の量刑に先立って行われたものや、加害者が施設に収容された後あるいは保護観察におかれた状態で行われたものもある。条件を満たした研究には、暴力犯罪と財産犯罪が含まれ、また成人と少年双方が含まれている。

対面式のRJCは、どのくらい効果的なのか？

10件の研究の平均効果が表示するところによれば、対面式のRJCを実施した犯罪の加害者は、スタンダードな刑事司法手続きへと無作為に割り当てられた対照群の人々に比べて、有意に犯罪をしなくなる。このRJCの効果は、財産犯よりも暴力犯罪において高くなる。

被害者についても、RJCに事件が割り振られた人々と、スタンダードな刑事裁判へと割り振られた人々とを比較したところ、対面式のRJCに参加した被害者は、事件処理に対するより高い満足度を示し、加害者からの謝罪をより受け入れ、かつよりそのような謝罪を真摯なものといっそう評価する傾向にある。

このレビューが政策立案者や決定者に対して与える示唆は何か？

スタンダードな刑事司法手続き、つまり多くの場合は裁判によるものと比べて、対面式のRJCは、加害者がプログラムに自ら参加し、被害者もRJCに進んで同意しているとき、その加害者による将来的な犯罪の頻度を低減させる。

対面式RJCの将来的な犯罪の頻度に対する効果をもっとも大きくなるのは、こうしたプログラムが従来型の司法手続きとあわせて行われた場合である。対面式のRJCを用いることで、高い費用対効果が期待される。なぜなら、英国での7つの実験データから、犯罪へと投入される給付額は、RJCと比べて8倍のコストがかかっていることが示されているからである。

このレビューの研究上の示唆は何か？

被害者と加害者の間で対面式RJCの採用と確保を行うにはスキルが要求されることもあり、どのようにして理解を促進するのかについてよりいっそう関心が向けられる必要がある。